

しかし、神の前に死さえ終わりではない。

サムエル記下 15 章 12-14、24-30 節

2020.08.16.

上野の森キリスト教会副牧師 渡辺晋哉

導入

キリスト教は「罪は赦される」と言っています。では、それに居直って「罪など、どうせ赦される」と語っているのでしょうか。いいえ。罪とはそんなに安上がりには解決しない問題です。必ず周りに影響し、愛する関係を奪います。罪は確かに完全に赦されますが、それにはあまりにも大きい犠牲があることを聖書は語っています。

旧約聖書中一番長い物語は、サムエル記下 13 章から 19 章の 7 章にわたって書かれているダビデ王がその身に招いた悲劇です。今日はその中で、ダビデ王の逃亡の場面を開きます。この悲しみこそが、やがて来る本当の希望を映し出しています。

まずこの長い物語の前段をお話しします。

イスラエルの英雄の王ダビデの、前半の生涯は、信仰者としてこれ以上ないほど理想的でした。しかし紀元前 1000 年頃の王のことです。多くの妻があり、彼の子供たちは異母兄弟姉妹の複雑な関係になっていました。中でもバテシェバという女は、ウリヤという軍人の妻でしたが、ダビデとの不倫によって身ごもりました。ダビデは策略を用い、こっそりとウリヤを死なせ、バテシェバをわが者としました。神様さえも欺こうとしたこの行為は、預言者ナタンを通して暴かれ、彼はやっとな罪を認めました。悔い改めた彼は確かに赦されましたが、彼の家族はこの時から崩壊していききました。

ダビデの娘タマルは、異母兄弟アムノンによって辱められます。しかもアムノンは力づくで一旦わが者とすると、今度はタマルを憎み、拒絶して捨ててしまいます。タマルは悲しみのあまり半狂乱になって放浪します。

タマルの実の兄アブサロムは妹をかくまいますが、加害者アムノンも父ダビデの子であることを尊重し、まずは事を荒立てないでいようとします。それは父・ダビデを信頼し、父の裁定に委ねることが最善と考えたからです。ところがこの信頼をダビデは裏切りました。

ダビデ王はアムノンに激怒するものの、女をわがものとする罪は、かつて自分がした同じ過ちでした。そのため手をこまねいて、何も言うことができません。アブサロムはついに妹の敵を取ろうと、自分でアムノンを殺します。

アブサロムは、正義を貫こうとしない父に失望し、失望は怒りに変わりました。やがて彼は北方イスラエル部族を巻き込んで反旗を翻します。その旗揚げにエルサレムから離れたヘブロンで礼拝行為を行い反乱軍を招集しました。ダビデは二人の息子を、一人は死、一人は断絶によって失い、生涯苦しむこととなります。

聖書をお開き下さい。サムエル記下 15 章 12-14 節、少し飛んで 24-30 節

12 いけにえをささげるにあたって、アブサロムは使いを送り、ダビデの顧問であるギロ人アヒトフェルを彼の町ギロから迎えた。陰謀が固められていき、アブサロムのもとに集まる民は次第に数

を増した¹³イスラエル人の心はアブサロムに移っているという知らせが、ダビデに届いた。¹⁴ダビデは自分と共にエルサレムにいる家臣全員に言った。「直ちに逃れよう。アブサロムを避けられなくなるとはいけない。我々が急がなければアブサロムがすぐに我々に追いつき、危害を与え、この都を剣にかけるだろう。」

²⁴ツアドクをはじめレビ人全員が神の契約の箱を担いで来ており、兵士全員が都を去るまで神の箱を降ろしていた。アビアタルも来ていた。²⁵王はツアドクに言った。「神の箱は都に戻しなさい。わたしが主のみ心に適うのであれば、主は私を連れ戻し、神の箱とその住むところを見せてくださるだろう。²⁶主が私を愛さないとと言われるときは、どうかその良いと思われることをわたしに対してなさるように。」²⁷王は祭司ツアドクに向かって言葉をつづけた。「わかったか。平和にエルサレムに戻ってほしい。息子のアヒマアツとアビアタルの子ヨナタン、この二人の若者を連れて帰りなさい。²⁸わかったか。私はあなたたちからの知らせを受けるまで、荒れ野の渡し場で待っている」²⁹ツアドクとアビアタルは神の箱と共にエルサレムに戻り、そこにとどまった。

³⁰ダビデは頭を覆いはだしてオリーブ山の坂道を泣きながら登っていった。同行した兵士たちも皆、それぞれ頭を覆い、泣きながら登って行った。」

概説

アブサロムに組する反乱軍が増えたと聞いたダビデは、直ぐに逃亡を決め、エルサレムの王宮を離れます。その時、祭司たちが、「神の箱」を携えてダビデに同行します。しかしダビデは神様がおられる「神の箱」を、本来あるべきエルサレムへ返すよう指示します。そうして一行は城門を出て荒野の草原をめざしました。

この後の決戦で反乱軍は密林の餌食となり敗北し、ダビデは無傷のエルサレムに帰還します。しかしダビデは彼にとって王権よりも大切と思えるものを失ったのでした。この悲しみを象徴するかのよう、エルサレムから逃亡する道筋、オリーブ山の坂道で、ダビデの姿は、苦悶と哀悼の道行でした。

今日はこの箇所から、深刻な罪の、報酬である絶望と死、しかしその先に与えられる救いについて見ていきます。

1) アブサロムの絶望—だが王の側には

少年時代アブサロムの目に、信仰に歩む父・ダビデはなんと勇敢で理想的な王と映っていたでしょう。しかし、その父がきわめて個人的な罪に陥り、転落するさまを目の当たりにし、深く落胆したことは想像に難くありません。

父権を失ったダビデの家庭で、目をおおいたくなる恥に満ちた出来事を、聖書は隠さずに述べています。ダビデはかつての勇敢さを持って正義を通そうとしません。父を、神様の権威の代理人、正義の守り手と心から信頼し、尊敬していたアブサロムにとって、それは耐えがたい裏切りでした。

反乱の手始めに、アブサロムは北方イスラエル部族の心を奪っていったのですが、彼の反乱の主張は「正しく、弁護できる者の声を聞く、正義の王はいない」という事でした。先ほど読んだ箇所の少し前を見ます。¹⁵章 3、4 節—アブサロムはその人に向かってこう言うことにしていた。「いいか、お前の訴えは正しいし弁護できる。だがあの王の下では聞いてくれる者はいない。」…「私がこの地の裁き人であれば、争い事や申し立てのある者をみな、正当に裁いてやれるのに。」—とあります。

アブサロムの正義に関する思いは、皮肉にも正義が通らなかつたからこそ敏感となり、長い時間待つうちに、自らの思う正義に固執するようになりました。正義はただ神様から与えられることを見失い、自分でつかみ取るしかないという、結論に至ってしまいます。神様に期待する力を失い、絶望したのです。期待が長引いて心が病んだのです。

彼はさまざまな問題を抱えた人物でしたが、「義に飢え乾いている人」であったと見ることができます。かくして、アブサロム「父は平和」と名付けられた王子は、父の命を脅かす者となってしまいました。

2)主権は神にある一主が私を愛さないと言われるときは

15章 25.26節一王はツアドクに言った。「神の箱は都に戻しなさい。わたしが主のみ心に適うのであれば、主は私を連れ戻し、神の箱とその住むところを見せてくださるだろう。26主が私を愛さないと言われるときは、どうかその良いと思われることをわたしに対してなさるように。」

反乱を聞いて直ちに逃亡を開始したダビデは、「み心に適うのであれば必ず神の箱のもとに帰還する」と神様への信頼を表します。

また、結果が彼の望み通りでなかったとしても、神様から与えられる信頼は揺るがないことを、主が私を愛さないと言われるときは、どうかその良いと思われることをわたしに対してなさるように。」とまで、言い切っています。神様を信頼するダビデですが、たとえ神様に愛されないとしても、その信頼を告白しつづけます。

神は愛ですが、愛が神ではありません。私たちは神様の全能のみ手を求めますが、いつしかそのみ業のみを、求めるようになっていないのでしょうか。神を神とするのではなく、神の奇跡、神の救い、神の癒し、神の恵み、神の愛を、神としてしまう時から、私たちは神様を失います。

私たちはどんなことでも願うことができ、神様は叶えることのできる方ですが、神様は私たちの要望に、時として徹底的にノーと言うこともある、絶対的他者であることを忘れてはなりません。絶対的他者であるからこそ、私たちの限界を超えて神様の恩寵を賜うことができになるのです。

この時、ダビデの願いに対して神様は一つを聞き入れ、一つを退けました。彼自身は神の箱の下に帰還しますが、愛するアブサロムの命は奪われたのです。それはダビデの絶望でした。

3)泣きながら上る道ーダビデの絶望

15章 30節 ダビデは頭を覆いはだしてオリーブ山の坂道を泣きながら登っていった。

この都落ちの際、ダビデが読んだとされる詩篇3篇に「身を横たえて私は眠り、私はまた目覚めます。主が支えていてくださいます。いかに多くの民に包囲されても決して恐れません6.7節」と神様への信頼を歌いきっています。まるで嵐の湖上、揺れる小舟で熟睡なされたイエス様を彷彿とさせる告白です。しかしダビデはその晩、本当に安らかに眠ったのでしょうか。ダビデは不安に苛まれるからこそ、主への信頼を言葉にして祈った歌なのだと思います。

ダビデの心を支配した恐れとは何でしょう。13節にーイスラエル人の心はアブサロムに移っているという知らせが、ダビデに届いた。ーとあります。また詩篇3篇の2、3節には一主よ。わたしを苦しめる者はどこまで増えるのでしょうか。多くの者が私に立ち向かい、多くの者が私に言います。「彼に神の救いなどあるものか」と。ーとあり、ダビデが脅威に感じていたのはイスラエルの反乱軍が増えて行くことであり、アブサロムには複雑な父親の感情を抱いていたようです。ダビ

デはアブサロムを親殺しの罪から守りたかったのかもしれませんが。

彼は頭を覆い、泣いて神様に懇願し、「アブサロムを手荒には扱わないで下さい」と祈ったに違いありません。息子の反乱は、ひとえに自分の父権の喪失、墮罪のためであったことを誰よりも深く知っていたはずですが。しかし、結果は將軍ヨアブによって、アブサロムは殺害されました。ダビデは「ああ、アブサロム、わが子よ。私がお前に代わって死ねば良かったのに」と声をあげて泣き崩れました。(サムエル下 18 : 33)

私は救われてクリスチャンになったにも関わらず、自分の命に絡みつく罪の力に引き込まれて、滅びの道を歩んでいました。家庭で神様の愛とその教えを説いていた父親の、実態を知らされた二人の息子は、深く傷つき、次男がこのまま一緒に暮らしていたらいつか父を殺してしまうと言い、私が一人家を出ることになりました。次男はその日、「俺の親父は死んでしまたんた」と何時間も号泣しつづけたそうです。長男は、やり場のない理不尽さを誰にもぶつけることが出来ずに抱えたまま、長い間苦しんでいます。

ダビデの物語は、私にとって決して他人ごとではありません。私は息子たちの救いを祈り、もし私か息子たちか、どちらかが滅びなければならないのであれば、どうか私を滅ぼしてくださいと懇願しています。そして事実、正義として見るなら、滅びるべきは私の方です。息子たちは神様の正義を私に貫いてくれたのです。私は本当に、父親の、クリスチャンの失格者、罪人の頭です。

ダビデの場合、結末はかけがえのない息子・アブサロムの死でした。徹底的な神様の拒絶でした。それは永遠の絶望に見えました。実際、この絶望は何代にもおよび、王国は分裂し、悔い改めと背信が繰り返されて、ついにイスラエルは選民失格・捕囚へと向かいます。都から追われるダビデの姿は、あたかもバビロン捕囚を予告するかのようです。全ては神様の恩寵による恵みの契約後にもかかわらず、罪を犯したダビデから始まりました。

しかし、その絶望、捕囚の先に、神様は救いを用意しておられます。それはこの物語の舞台、オリーブ山でなし遂げられました。

結論 「平和の君」の入城

ダビデと最愛の息子アブサロムが天国で再会できたのか、私たちには解りません。それは神様の領域で、その是非に入り込もうとする人間の願望は、固く拒絶されます。事実アブサロムは父に看取られることなく死を迎え、ダビデもまた弱々しく哀れな死を迎えます。私たちは絶望を認めなければなりません。すなわちそれが、罪の支払う報酬＝死の現実です。

しかし、神の前に、死さえ、終わりではありません。

涙を持ってダビデが上ったオリーブ山の坂道を、1000年以上の時を経て、義なる王・平和の君として下り、エルサレムへと入城した方・イエス様がおられました。

この方はアブサロムの苦しみを引き受けて「義に飢え乾くものは幸いだ、その人は満たされる」と宣言し、神の国に私たちを招き入れてくださいました。かけがえのないラザロの死を嘆く姉妹と共に涙を流され、「私はよみがえりです」とおっしゃいました。神のみ子である方なのにゲッセマネの祈りは父なる神様に拒絶され、あらゆる父子の断絶を引き受けて下さいました。ダビデはアブサロムの代わりに死ぬことができませんでしたが、この方は、全ての人の身代わりとなって十字架で死に、決定的な断絶、敵意、絶望を、時空を超えて完全に打ち砕いてくださいました。そしてこ

の方を人々は、他でもない「ダビデの子」と讃美しました。

そうです。罪とは安上がりには解決する問題ではありません。そこには想像を絶する犠牲があります。その犠牲の全てをイエス・キリストが十字架で受けてくださいました。十字架は神様の義と神様の愛の対立を一つにします。

もう一度言います。神の前に死さえ終わりではありません。イエス様は死からよみがえられたのです。

♪神のひとり子 救い主よ 私たちの罪のため
悲しみの道 たどられて 十字架に死なれた
ただ一人 死の力を 打ち砕き よみがえられた主
ただ一人 天に上り 神の右に 栄光のみ座に
神のひとり子 救い主よ 今も生きてみ業を
神のひとり子 救い主よ 栄光 永遠にあれ

作詞・作曲 岩渕亮「神のひとり子」

今日ここにこの世の不条理に失望し、怒りに向かう苦しさを飲み込んでいる人はいませんか。誰にも言うことのできない罪を抱え、一人悩む人がいるのでしょうか。自業自得としか言うことのできない罪の傷跡に痛んでいる人はいませんか。あなたは心のすべてを注ぎ出して祈ってよいのです。しかし、願いの通りにならず、神様に退けられたとしても、行く末がわからないままでも、死だけが結末に見えたとしても、決してあきらめる必要はありません。その先にこそ、ただ一つの十字架が立てられているのです。

祈り

天のお父様。死の滅びの中にいる罪人の頭が、あなたをお父様とお呼びするは。

あなたの前に失格者の私です。しかし、私からお父様へ向かう道が完全に閉ざされたからこそ、その後に用意されたお父様からの救いを、イエス様の復活をいただきました。

あまりにむごい十字架の犠牲を引き受けてくださった、イエス様のお名前でお祈りします。

アーメン。